

三重大学ベトナムフィールドスタディ
2017
報告書



2018年3月
三重大学ベトナムフィールドスタディ 2017
参加者一同

目次

はじめに.....	3
I. 概要.....	5
1. 実施概要.....	5
2. 全体日程.....	6
3. 参加者氏名.....	7
4. 受入れ先基本情報.....	8
5. ベトナム基礎情報.....	9
II. 事前準備.....	10
III. 訪問先・授業参加報告(感想).....	12
1. サイゴン大教会、郵便局、歴史博物館.....	13
2. ベンタイン市場、ドンコイ通りで買い物.....	15
3. 統一会堂.....	16
4. 水上人形劇.....	18
5. クチトンネル (Địa đạo Củ Chi) 歴史遺跡.....	20
6. 戦争証跡博物館.....	22
7. ベトナム文化の授業.....	24
8. ベトナム語の授業.....	26
IV. 最終発表.....	28
1. 歴史・生活グループ.....	29
2. 教育グループ.....	32
3. 報告の様子.....	34
V. 全体の報告(感想).....	36
山下 響 (人文学部法律経済学科 1 年).....	37
河合 紘志 (人文学部文化学科 1 年).....	41
佐々木 歩 (人文学部文化学科 2 年).....	43
隅 まりや (人文学部文化学科 2 年).....	46
内田 陽菜 (教育学部教員養成課程理科教育コース 2 年).....	50
坂本 京子 (教育学部教員養成課程英語教育コース 2 年).....	54

中林 彩乃	(教育学部教員養成課程英語教育コース 2年)58
佐藤 有紗	(教育学部教員養成課程理科教育コース 2年)61

おわりに.....	64
-----------	----

VI. 巻末資料

1. 担当業務
2. ホーチミン市師範大学との合同グループ
3. 修了証書授与式



はじめに

今回のベトナムフィールドスタディは2月28日から3月8日まで9日間で行われました。10月18日に開催した説明会には多数の学生が参加してくれたのですが、実際にはなかなか応募者が現れず、実施できるか不安な日々が続きました。それでも蓋を開けてみれば、まずまずの応募状況で、最終的に8名の学生が参加することとなりました。

今日、日越関係は2013年に外交樹立40周年を迎えるなど、ますます盛んになっています。またベトナムの人はとても親日的で、日本への留学生も2017年には6万人（日本学生支援機構）を超えるなど右肩上がりが増えていきます。三重大学でも毎年15名～20名を受け入れています。日本からベトナムへの留学はまだ少ないようですが、短期研修型のプログラムはとても多く、私たちの滞在期間中も、日本から5大学がホーチミン市師範大学に来ていたほどでした。このように日越両国の学生交流はますます盛んになっている状況です。

しかし、交流を深めるというのはどういうことでしょうか？私が開講式や閉校式で問いかけたことです。私たちを受け入れてくださったホーチミン市師範大学の日本語学部長のCao Le Dung Chi先生も仰っていたことですが、単にベトナムや日本について興味や知識があるというだけでは交流を深めたことにはなりません。何より交流するには人がいないといけません。人同士の付き合いですから、お互いを尊重し合いながら、本音で話しあえることが大切になってくるでしょう。学生の立場でいえば、一緒に机を並べて同じ目線になり、そしてお互いに学び合うことが求められるのだと思います。

今年度のフィールドスタディでも、事前勉強会を行うとともに、ホーチミン市師範大学でもベトナム語とベトナム文化の授業をベトナムの学生と一緒に受けました。これはベトナムの言葉や文化を尊重して学ぶ姿勢を持つためです。実際にベトナムと日本についてお互いに教えあうことで、それぞれが自分の言葉や文化、そして自分自身に向き合うことに繋がったのではないのでしょうか。その中でお互い本音で話しあえていければと思います。

毎回このフィールドスタディでは学生が主体となって調査のテーマや方法を考えるようにしています。これは、日本人学生とベトナムの学生がともに話し合い、調査を実施し、とりまとめ、発表するものです。またその中で一緒に共感したり悩んだり、アイデアを出し合ったりして、共に学び合うことを目指したものです。

今年度はフィールドスタディのテーマを各グループで早い段階で検討したこともあって、ある程度、テーマを絞ってベトナムに行きました。最初はベトナムの学生との話し合いもスムーズに進んだと思います。しかしながら、実際に進めていく中で、自分たちの意見や主張を伝えることの難しさを実感することもあったのではないのでしょうか？とても限られた時間の中で、どうやってベトナムの学生と意見をまとめ、訪問先での調査を有効なものにするのか、とても難しかったと思います。でもそうした活動の合間にも、学生どうして一緒に昼食をとり、情報を交換してグループの一体感を作ろうとしていました。その中で多くのことを学んだと思います。

今回もベトナムの歴史や文化を学ぶために、ベトナム戦争証跡博物館、統一会堂、クチトンネルを訪問したり、水上人形劇を鑑賞したりしました。これらにはベトナムの学生も一緒に来て案内や通訳をしてくれました。まだまだベトナム語が全く分からない私たちにとって、とても心強く、助けられました。そうした中で信頼関係が生まれていたとしたら、とても嬉しいことです。

そして、今年もホーチミン市師範大学の学生のご家庭に宿泊させて頂きました。毎回そうなのですが、今回も行く前は不安そうな表情をしていた学生が、翌日ホテルには、本当に楽しかったという笑みを浮かべて戻ってきました。いずれの家庭でも暖かく迎えてくださったようですが、いろいろと言葉が通じないもどかしさもあつたでしょうし、習慣の違いから戸惑いもあつたはずですが、それでもベトナムの学生がいつも寄り添ってくれたようです。わずか1泊でしたが、異文化の中で交流するとはどのようなことなのか、一人ひとりが感じる事ができたと思います。それだけでなく、学生たちはそれを楽しむことができた実感しています。何より、「またベトナムに来たい！」と学生が思ってくれたということが、それを表しているのではないのでしょうか。

学生たちの最終発表は、限られた時間の中で頑張ってくよくまとめていました。まだまだ不十分なところはあるでしょうが、このまま発展させればとても素晴らしい研究になると私たち教員も認めています。

この報告書は、こうした学生たちがベトナムでのフィールドスタディに真摯に取り組んだ感想が率直に述べられています。是非、学生たちが何を学び得たのかを読み取っていただければ幸甚です。

最後になりましたが、このたび受け入れて下さったホーチミン市師範大学の日本語学部長の Chi 先生、Nga 先生、Lieu 先生など先生方や学生の皆さん、関係各位、またプログラムの実施に向けて最大の支援をしてくださった本学国際交流センター長の堀先生をはじめ国際交流チームの皆さん、その他ご協力くださった全ての方々に深く感謝申し上げます。

(奥田久春)

I. 概要

1. 実施概要

実施期間：2018年2月28（水）～3月8日（木） 9日間

引率者： 国際交流センター 正路真一 助教
教養教育機構 奥田久春 特任講師

行先：ベトナム社会主義共和国 ホーチミン市

訪問先：ホーチミン市師範大学 ホーチミン市内

プログラムの目的：

協定大学であるホーチミン市師範大学での授業や学生交流、フィールドスタディ、ホームステイの経験を通して、グローバルな視点や国際感覚を持ちながら主体的に行動し、参加メンバーと協力しながら活動を進め、また異文化にあつて積極的にコミュニケーションを図ろうとするグローバル人材に求められる能力・資質を育成する。

プログラムの概要：

(1) ホーチミン市師範大でのベトナム語語学・文化学習

協定校であるホーチミン師範大日本語学科にて、ベトナムについての文化理解、語学学習。

(2) フィールド調査の実施

学生主体でグループになってテーマを検討、計画、現地調査を実施する。

(3) 施設訪問その他観光名所も訪問予定。

フィールド調査以外に、ベトナムの歴史などを学ぶためにベトナム戦争証跡博物館、クチトンネルなどを訪問。

(4) 学生と家族との異文化交流

・師範大生宅で1泊2日のホームステイ。

参加費用：航空券代、海外旅行保険代、宿泊、食費等含め、計15万円ほど自己負担

(借上バスや、研修に係る入場料等の費用は大学負担)

募集方法：2017年10月18日に募集説明会を実施、10月31日まで全学の学生（学部1年生～大学院生）に公募。応募時に参加の動機とベトナムに関心のあることを記述して申請。

2. 全体日程

月日	時間	内容
2月28日 (水)	8:00	中部国際空港集合
	10:00	中部国際空港発 (VN341)
	14:00頃	TSN 空港到着
	16:00頃	中央郵便局、サイゴン大教会見学
	17:30頃	ホテルチェックイン
3月1日 (木)	9:00～9:30	開講式：C1009 教室、Ms. Lieu、Ms. Nga、ホーチミン市師範大学生
	9:30～11:30	学生交流、フィールド調査打合せ
	11:45～13:00	ホーチミン市師範大学 歓迎昼食会
	13:30～15:30	ベトナム語入門授業 C1009 教室
	16:00～17:30	ベントイン市場、ドンコイ通り
3月2日 (金)	8:00～9:30	ベトナム文化入門① Ms. Lieu (通訳:Ms. Trang) C612 教室
	10:00～11:30	ベトナム文化入門② Ms. Lieu (通訳:Ms. Trang) C612 教室
	11:30～12:45	昼食 (大学の食堂 各自)
	13:00～14:30	統一会堂
	15:00～16:00	歴史博物館
	17:00～18:00	水上人形劇
3月3日 (土)	8:00～11:00	クチトンネル
	12:00～13:00	イオンモール (昼食)
	14:00	ホテル着 自由行動
	17:00～	ホームステイ (各自ベトナム学生と一緒に出発)
3月4日 (日)	午前中	ホームステイ
	12:00	ホテルに帰着
	午後	自由行動
3月5日 (月)	9:00～11:00	戦争証跡博物館
	午後	フィールド調査 歴史グループ (Phước Hải 寺、Vinh Nghiem 寺、図書館) 教育グループ (ホーチミン市師範大学の日本語授業見学)
3月6日 (火)	終日	フィールド調査 教育グループ International School of Saigon 幼稚園 Hoang Hoa 中学校、発表内容のまとめ
		歴史グループ 発表内容のまとめ
3月7日 (水)		ホテルチェックアウト
	9:00～11:30	発表準備 (C612、C611)
	11:45～12:45	昼食
	14:00～16:00	最終発表会・修了式 C1009 教室

	17:00～	ホテルに戻り帰国準備
	19:00～	空港へ移動 イオンショッピングモールにて夕食
3月8日 (木)	0:45	TSN 空港発 (VN340)
	7:35	中部国際空港着 解散

3. 参加者氏名

氏名	学部 学科・コース	学年
山下 響	人文学部法律経済学科	1年
河合 紘志	人文学部文化学科	1年
佐々木 歩	人文学部文化学科	2年
隅 まりや	人文学部文化学科	2年
内田 陽菜	教育学部 理科教育コース	2年
坂本 京子	教育学部 英語教育コース	2年
中林 彩乃	教育学部 英語教育コース	2年
佐藤 有紗	教育学部 理科教育コース	2年
(引率) 正路 真一	国際交流センター	助教
(引率) 奥田 久春	教養教育機構	特任講師

応募申請順。また、上記の所属、学年はベトナムフィールドスタディ参加当時のものです（以降、本報告書に掲載している所属、学年は当時のもの）。現在はそれぞれ進級しています。

4. 受入れ先の基本情報

受入大学：ホーチミン市師範大学 Trường Đại học Sư Phạm TP. Hồ Chí Minh

英語名：Ho Chi Minh City University of Education

- 1976 年開学
- 教育大学（21 学部、11 専攻、32 コース）
- これまでの卒業生：53,646 名
- 学生数：14,378 名（留学生：100 名）

住所：280 An Dương Vương, Phường 4, Quận 5, TP.HCM

URL：<http://hcmup.edu.vn/>

データ出所：<http://hcmup.edu.vn/>（2018 年 3 月 31 日閲覧）

今回お世話になった先生方

Le Thi Hong Nga (Ms.) 日本語学部

Le Thuy Lieu (Ms.) 哲学部

Nguyen Trang (Ms.) 日本語学部

Nguyen Thi Linh Chi (Ms.) 日本語学部

5. ベトナム基礎情報



Google Map

面積：32万9,241 km²

人口：約9,270万人（2016年、ベトナム統計総局）

都市：ハノイ（首都、約650万人）、ホーチミン市（約720万人）、
ハイフォン（約190万人）カントー（約120万人）、ダナン（約90万人）

民族：キン族（86%）、53の少数民族

言語：ベトナム語

宗教：仏教、カトリック、カオダイ教

政体：社会主義共和国

元首：チャン・ダイ・グアン国家主席

政権：ベトナム共産党 党首グエン・フー・チョン書記長

首相：グエン・スアン・フック首相

産業：農林水産業、鉱業、工業

GDP：約2,019億米ドル（2016年、ベトナム統計総局）

一人当たりGDP：2,215米ドル（2016年、ベトナム統計総局）

経済成長率：6.21%（2016年、ベトナム統計総局）

出典：外務省 HP (<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/vietnam/data.html>)

（2018年2月1日閲覧）

Ⅱ. 事前準備

ベトナムフィールドスタディでは、メンバー決定から出国までの期間に5回の勉強会を開き、準備を進めてきました。勉強会の内容は以下の通りです。

- 第1回勉強会 11月30日(木) 18:00~20:00
メンバーの顔合わせ、アイスブレイキング(他者紹介ゲーム)、フィールドスタディの目的の確認、事前勉強会の希望日の確認、ベトナム事前学習として「ベトナム料理」「観光」「おみやげ」の各分野を調べてくる担当者を決めました。また、各自の興味・関心に基づいたフィールドスタディのテーマ、訪問先や調査希望について検討していただくこととしました。出発日と帰国日、日数などを決めました。
- 第2回勉強会 12月14日(木) 18:00~20:00
ベトナム語学習(1):ベトナムからの留学生 Tung Tran(工学部2年生)さんに講師をお願いして、ベトナム文字、簡単な挨拶、自己紹介の方法を学びました。また各自が検討してきた関心に基づいて、フィールドスタディのテーマを出し合い、①ベトナムの歴史遺跡、生活、②教育、英語教育、平和学習、日本語教育、の2つのテーマ群に出しました。航空賃の確定と支払いについて連絡し、行程案について確認しました。
- 第3回勉強会 1月18日(木) 18:00~20:00
ベトナム語学習(2):Tranさんから、数字の教え方、レストランでの注文の仕方を学びました。また「ベトナム料理」について担当者(内田、坂本)から調べた内容を報告しました。フィールドスタディのテーマを大きなテーマ群として2グループを作り、訪問地や調べたい内容について話し合いました。
- 第4回勉強会 2月1日(木) 18:00~20:00
「観光」について担当者(中林、佐々木、河合)から調べた内容を報告しました。ベトナムの歴史について学びました。海外旅行保険や旅レジ、パスポートの写しなど旅行に必要な手続きについて確認しました。フィールドスタディの調査内容について更に話し合いました。
- 第5回勉強会 2月15日(木) 16:30~18:00
海外安全渡航について国際交流チームの秋保課長から説明を受けました。「おみやげ」について担当者(佐藤、隅、山下)から調べた内容を報告しました。出発までの準備や持っていくもの、携行必需品、旅程について確認しました。フィールドスタディで事前に調べて分かったこと、現地での調査計画について簡単に説明しました。

Ⅲ. 訪問先・授業参加報告（感想）

各訪問先の概要やホーチミン市師範大学での授業を受講した内容や感想です。なお、フィールド調査に伴う訪問先についてはⅣ章やⅤ章で報告されています。

1. サイゴン大教会、郵便局、歴史博物館

人文学部 文化学科 2年 佐々木 歩

(1) サイゴン大教会

フランス統治時代、1863-1880年にかけて建てられたカトリック大司教座大聖堂。赤レンガ造りのネオゴシック様式で、とても荘厳な雰囲気です。この付近のドンコイ通り、サイゴン中央郵便局など一体でホーチミン市の観光地となっています。教会、郵便局、オペラハウスなどのヨーロッパ式の建物が多く建てられているので、「東洋のパリ」とも言われたりするそうです。サイゴン大教会、中央郵便局、ホテルマジェスティックサイゴン、ホーチミン人民委員庁舎、市民劇場の代表的な5つの建物が、「5大コロニアル建築」とよばれています。私たちが行ったときは工事中で、中に入ることはできませんでしたが、それでもインスタ映えする建物でした。工事が終わったら、また足を運んでみたいと思います。



(2) サイゴン中央郵便局

こちらもフランス統治時代に建てられた、五大コロニアル建築の一つで、観光地としても有名です。夜はライトアップされてめっちゃインスタ映えな建物です！現在でも郵便局として通常の郵便、通信作業が行われているそうです。正面から入ると、アーチ状に作られた天井がヨーロッパ風です。奥にホーチミンの肖像画がドーンと構えてあります。建物の中はお土産がたくさん売られていて、郵便局限定のお土産もあるそう。昔の電話ボックス風を感じさせるATMもあって遊び心満載です。教会は外から見るだけでしたが、郵便局は実際に中に入ってお土産を見るもよし、電話ボックス風のATMを使うもよし、ここから手紙を出すもよし、待ち合わせ場所にもピッタリな場所なので、待ち合わせに使うもよし、外観をインスタに挙げるもよし、とにかく、たくさんの楽



しみ方がある建物でした。

(3) 歴史博物館

この歴史博物館は、ベトナムの古代の歴史に関する資料を展示しているところです。ここにも、入ってすぐにホーチミンさんがいました。原始時代から始まり、グエン王朝までの歴史資料が主に並べてあります。石器、陶器、彫刻など、見て楽しめるものが多いので、歴史博物館というよりは美術館のようでした。私が一番驚いたのは、ミイラが展示されていたことです！説明によると、19世紀



ごろ（グエン朝時代）の王族の女性のミイラということでした。生のミイラを見たのは私も初めてだったので驚きましたが、これからミイラを見る機会はほとんどないと思うので、貴重な体験でした。このミイラは、ホーチミン市で発見されたとても保存状態のいいミイラだそう。ぜひ1度は見てみる価値があると思います。

2. ベンタイン市場、ドンコイ通りで買い物

教育学部 英語教育コース 2年 中林 彩乃

ベンタイン市場

ベンタイン市場は、生鮮食品から衣類、雑貨まで何でも揃うホーチミン市最大の市場です。市場の中は、ジャンルごとに集まった一坪程度のお店がびっしりと立ち並び、通路も狭く光客も多いため混雑しています。かつてベンタイン市場は地元の人々が日常的に買い物に利用する場所でしたが、最近では観光客が多く訪れるようになったため、どの店も商品の値段が高く、値段交渉をして買い物する必要があります。例を挙げると、ドンコイ通りで買うと約 80,000 ドン(約 400 円)のTシャツは、ベンタイン市場では値段交渉をしなかった場合、約 600,000 ドン(約 3000 円)で売られていました。

現地のベトナム人学生から、ベンタイン市場では買わずに見るだけにするのが良いと聞いていたので、私は何も購入しませんでした。市場の中はお店がひしめき合い、店員さんの呼び込みが飛び交っていて、ゆっくりと落ち着いて店を見ることはできませんでした。熱気に包まれ、生き生きとした市場の雰囲気を楽しむことが出来ました。お店の中には、昆虫の標本など珍しいものを取り扱うところもあったので、そのようなマニアックなお店を巡るのも面白いのではないかと思います。

ドンコイ通り

サイゴン大教会からサイゴン川に向かう道がドンコイ通りで、有名ブランド店や高級ホテル、フランス統治時代の建物から、お洒落な雑貨屋などが多くあります。ドンコイ通りにある、日本人観光客に人気の Tombo, emem という雑貨店には、ベトナムらしい刺繍の小物や、ベトナムの伝統工芸のバッチャン焼きという陶器を多く取り扱っていて、お土産用に購入するのも最適です。また、通りには両替屋もあるのでとても便利です。タクシーでドンコイ通りへ行く場合は、市民劇場を目的地として運転手に伝えればスムーズに行くことが出来ます。

私たちは、ホーチミン滞在中ほぼ毎日ドンコイ通りに出かけました。刺繍小物やTシャツなどのお土産もとても安く、お土産はほとんどドンコイ通りで購入することが出来ました。ドンコイ通りの店で食べたバインセオは、私の中で一番おいしいと思うベトナム料理でした。夜でも明るく、賑やかなドンコイ通りを七人の仲間と毎晩歩いたことは、楽しい思い出になりました。

3. 統一会堂

人文学部 文化学科 1年 河合 紘志

ベトナム戦争終結となった場であるということを全く知らなかった。庭には戦車や戦闘機が展示してあった。ここに展示してある戦車はベトナム戦争時の南ベトナム政府の大統領官邸（現統一会堂）に侵入してきた北ベトナム軍の実物の戦車である。戦車がフェンスを破って、この大統領官邸に侵入し、南ベトナムの首都サイゴン（現ホーチミン市）が陥落した様子は全世界に配信された。



←統一会堂二階か

ら正面の大通りを眺める

北ベトナム軍の戦車が迫りくる様子を大統領はどのような気持ちで眺めていたのだろうか。

二階には大統領執務室や応接間、寝室などがあり非常に豪華で、昔は宮殿と呼ばれていたのもわかる様子であった。三階や四階には図書室や映画館、ダンスホールなど、娯楽施設も整っていた。



しかし、地下に行くとその様子は一変した。同じ建物とはとても思うことのできないものだった。戦争時の作戦指令室や通信室には様々な機器や電話がいくつもあった。また、爆撃から大統領自身の命を守るために非常に頑丈に作られているのが一目でわかった。驚



いたことに、地下室にも大統領の寝室があった。二階にあった寝室とは雰囲気は全く違い、とても質素な造りで、また、すぐ隣には作戦室などがあり、果たしてこのようなところで安らぐことができたのであろうかと思った。



三階には不思議なことにヘリコプターが駐機してあった。ヘリポートになっているのでヘリコプターが駐機してあっても不自然ではないが疑問に思った。南ベトナムの首都サイゴンが陥落した時に大統領がここからヘリコプターで亡命をしたことを知り、この一つの建物に大統領家族の住まいとしての役目とともにベトナム戦争に関する様々な工夫が凝らされている面を知ることができ、

平和と戦争の両方を一気に感じる事ができた。

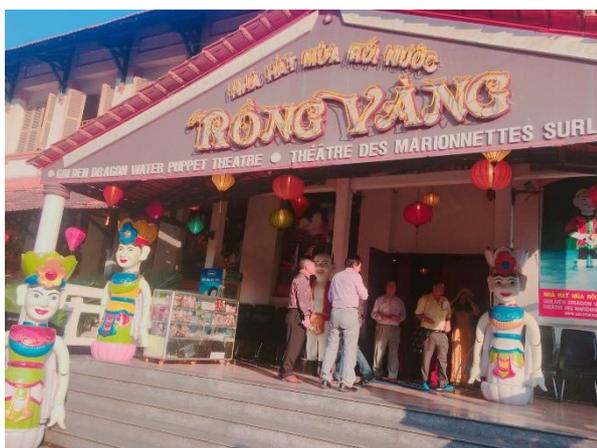
最期に集合写真



4. 水上人形劇

教育学部 英語教育コース 2年 坂本 京子

水上人形劇というのは、ベトナム伝統芸能であり、1000年以上の歴史があります。その名の通り、水上を舞台に、カラフルに色を塗られた人形たちが、物語や音楽に沿って縦横無人に動き回ります。私たちが見たものは、伝統楽器の楽団により、生演奏されていました。水上人形劇は、ベトナム北部の、暑く湿気の多い地域の農民たちが、収穫の祀りの時などに池や湖を舞台に上映していたと考えられています。水上でどのように人形を操っているのかは長い間劇団の中での門外秘出とされていたそうです。実際は、人形を操るパフォーマーが水を張った舞台の、三方を囲んでいる薄い幕の奥に隠れて人形を操っています。人形の仕掛け部分は水の中に沈んでいるため、観客から見るとまるで水の上を自由自在に人形が動きまわっているように見えるのです。ストーリーとしては、とても分かりやすいもので、言葉がわからなくても楽しめます。1話数分の短編が十数話で構成されていて、伝統楽器の生演奏と歌やセリフに合わせて、人形が動き、場面がどんどん変わっていきます。内容は伝説をモチーフにしたものや、人々の生活を描いたもの、田植えの様子を見せたものなどバラエティ豊かで、途中で水しぶきや花火があがります。子どもも大人も楽しめるパフォーマンスになっています。



私たちはこの水上人形劇を、ベトナムフィールドスタディの3日目にゴールデンドラゴン水上人形劇場で鑑賞しました。入り口には水上人形劇でつかわれるユーモラスな人形がたくさん置かれており、私たちをととてもわくわくした気持ちにさせました。とても大きな劇場で、海外からきたお客さんが特に多くいました。



上演が始まると、舞台の両端にいる楽器の演奏団が演奏をし始め、その音楽に合わせて人形があらわれました。人形の軽快な動きと演奏がきれいに重なっていて、まるで生きているかのようで、昔のベトナムの生活をタイムスリップして実際に見ているようでした。ストーリーも簡単なものばかりで、ベトナム語

が一切わからない私たちでも飽きずに楽しむことができました。劇中にレールの上を人形が走ったり、人間以外の動物や龍など人形も現れたりして、見ていて飽きませんでした。クライマックスには大量の水しぶきと花火があがり、観客がどよめきました。同じ人形劇ですが、日本の黒子を使っておこなう人形劇とは大きく異なり、私の人形劇への印象が大きく覆されました。まるで大型テーマパークで見ることのできる水上パレードのようでした。

5. クチトンネル (Địa đạo Củ Chi) 歴史遺跡

教育学部 理科教育コース 内田 陽菜

1. クチトンネル歴史遺跡について

クチトンネル歴史遺跡はホーチミン市の北西 70 kmほどの距離にあり、ホーチミン市街地から車で1時間半ほどで訪れることができる。

クチトンネルはベトナムのホーチミン市クチ県を中心に、全長約 200km の地下トンネルネットワークである。ベトナム戦争中に、南ベトナム解放民族戦線によってゲリラ戦の根拠地として作られ、カンボジアとの国境付近までトンネルが張り巡らされていた。戦時中、南ベトナム解放民族戦線の兵士たちは狭いトンネル内に身を潜めて暮らしており、当時の生活の様子や戦争中に使われた罫の数々が、戦争史跡公園として残されている。

2. 概要

クチトンネル歴史遺跡では、英語でのガイドをしていただきながら見学を行った。実際に使われていたトンネルに入って見学することもできた。トンネルのフタは内側に取り手がついており、トンネルの入り口を覆うことができる。そのフタを葉で覆うことでトンネルの入り口はほとんど目立たないような工夫がされていた。そしてトンネルの中は非常に狭く暗かった。前の人を見失うとどちらに進んでよいかわからない上に常にかがんだ状態で進まなければならない、当時の兵士たちの生活は非常に厳しいものであったことが想像できた。



また、当時は森の中のあちらこちらに落とし穴などの罠が仕掛けられていたという。それらの罠も見学でき、ただ落とすだけではなくその中に鉄の針が張り巡らされていたり、相手の逃げ場を奪うようなつくりになっていたりした。また、ベトナム人たちは敵から飛んできた銃弾を利用して自分たちの銃弾に再生したり新しい武器をつくったりしていたという。



3. 感想

トンネルの中を実際に通ってみることや武器をみて、当時の兵士たちの生活や戦争の様子がうかがえ、胸が締め付けられる思いだった。また、それが誇らしげに展示・案内されていることがすこし引かかった。

6. ホーチミン市戦争証跡博物館

人文学部 法律経済学科 1年 山下 響



1) ホーチミン戦争証跡博物館について

ホーチミン戦争証跡博物館はホーチミン市、ヴォーバンタン通りに位置するベトナム戦争に関する展示を行う博物館である。

屋外には、戦車や戦闘機をはじめとした戦闘用機械の展示が行われている。屋内では戦争が勃発するまでの経緯を文献や写真で説明するパネルや銃火器、墜落した米軍機の機体の一部、爆撃や枯葉剤散布の犠牲者や被害者の写真、反政府運動者への拷問や処刑の様子まで、ベトナム戦争に関する展示が多岐にわたってなされている。また、プロパガンダポスターや子供たちが平和を願って描いた絵なども目にすることが出来る。

2) 感想

「平和学習」ということでここを訪れました。父が長崎出身ということで昔から原爆について聞いたり、長崎の平和記念館に行ったりしたこともあります。また、母が四日市市出身であり、太平洋戦争時の「四日市大空襲」などについても教わってきました。

今回の訪問を通して一番感じたのはやはり「戦争の虚しさ」です。戦争というものはどういった形であれ何も生みません。それは国家間であっても、地域間、民族間のものでも変わりません。戦争とは惨いものであり、多くはかけがえのない命を奪っていきます。

改めて戦争の無意味さを認識できたこととともに、そのケースの1つとしてうっすらとしか知らなかったベトナム戦争についてより知識を増やせたことが今回の訪問の一番の収穫であったと感じます。

太平洋戦争終結後約 70 年、ベトナム戦争終結後 40 年経った今日、両国はある意味 1 つの節目の上に立っていると思います。これからを担う日本人の 1 人として、またベトナムの未来を担う若者と交流した者の 1 人として「平和」の大切さを世界に訴えかけていきたいです。

7. ベトナム文化の授業

人文学部 文化学科 2年 隅 まりや

私はベトナムの文化の授業について学んだことをまとめようと思う。私たちの受けた授業のテーマは、「日本文化とベトナム文化の比較」であった。まず、ベトナム人が抱く日本のイメージに、「敗戦し貧しかったが、先進国になった」というものがあるそうだ。そしてベトナム人は、まだベトナムの事を途上国だと思っているという。しかしベトナム人と日本人は、親属国であったということ、頭が良く勤勉で勇気があること、という点で共通している。こうした共通点があるため、ベトナムは必ず日本のような先進国になれると人々は信じており、日本に学びたいと考えているそうだ。私はそれを聞いて、日本語学科の学生たちがあれほど熱心に日本語を学んでいる背景をよく理解することができた。

次に、ベトナムの文化はどのように形成されたのか、その基礎について学んだ。まず、ベトナムの気候・地理の面から文化を見てみよう。ベトナムの地形は日本と似ている(どちらかというとなベトナムの方が自然が多い)。そしてベトナム北部には四季があり、日本と同じ気候である。これに対して南部は温かいため、日本とは異なっている。次に、中国から学ぶことへの姿勢だが、ベトナム人は中国から地理的にも文化的にも独立したいと願っていた。一方、日本人は航海の危険を冒してまでも中国の文化を学びに行くなど、非常に積極的であった。これはベトナムと中国の大きな相違点の一つである。理由としては、ベトナムの風土はもともと自然に恵まれていたため、勉強に励まなくても生き延びることができてきたからだと考えられるという。こうしたかつての勉強面での姿勢を反省し、現代のベトナムの子供たちの将来の夢には、「教師」や「医者」が多いという。現代のベトナム人は、知識の量を重視しているそうだ。

そして、ベトナムの文化に大きく影響を与えているものに「陰陽バランス」というものがある。陰陽とは、相反するものが同時に存在している状態をいい、そのバランスが重視されるのである。つまり反する両部が統一した状態について考えるのである。例えば、ベトナムの伝統的民族衣装であるアオザイは、上半身はすっきりしていて身体にフィットしているが、下半身はスリットにより広がっていて身体のラインもあまり出ていない。これには陰陽バランスが見られるということになる。一方、日本の着物は全身で身体のラインの隠れ方がほぼ同じである。また料理については、ベトナムは一度の食事の中に甘い味付けのおかず、塩辛い味付けのおかずが同時に存在しており、交互に食べることで味の調整をしている。これに対し日本の伝統料理は全体的に薄味で、似た味付けのものが多い。さらに、陰陽バランスは、同時に存在する両者がはっきりと別れている状態だけが良いものとされるわけではなく、「陰」から「陽」への途中変化の状態にあるものを非常に良いと考えている。これはベトナムの飲食文化において最も盛んに見ることができる。例えば、孵化途中のアヒルの卵(「ホビトン」という)は、卵の最も栄養のある状態とされ、ベトナムでは最

高級の食材だという。他にも、米になる途中の稲の実「コウン」が、季節に応じた旬の食材として重宝される。

私はベトナムの文化と日本の文化の比較を考える上で、意外にも共通点が多いことに驚いた。もともと中国から文化が伝わってきて、漢字を使っていたという共通点は根本として認識していたが、おいおいとどってみると、中国への感情の違いが見られ、現在は全く異なる文字や発音、文法をもつ言語がそれぞれ形成されている。共通点だと思っていたものが、深く考えてみると相違点につながるというのが面白かった。また、本授業はフィールドスタディー歴史チームの発表原稿を考える上で非常に大切なヒントとなった。これからも、ベトナムと日本の共通点や相違点を見つけたり、ベトナムの文化に見られる陰陽バランスの影響を発見したりするなど、ベトナムの文化をよりよく理解し、身近なものに感じられるよう努力したいと考える。

8. ベトナム語の授業について

教育学部 理科教育コース 2年 佐藤 有紗

ホーチミン市師範大学でベトナム語の授業を受けました。まず、ホーチミン市師範大学へ着いて驚いたことは大学の大きさでした。三重大学よりも大きな佇まいで、町の中にある大学とは思えないほどの大きさでした。海外の大学へ行くのが初めての私にとっては新鮮でした。



ベトナム語の授業は、私たち日本人一人一人にベトナム人学生がついてくれました。先生として大学の日本語学部の4年生が授業してくれました。大学生とは思えないほど流ちょうな日本語で驚きました。ベトナム人の学生も日本語と英語をまじえながら私たちにベトナム語を教えてくださいました。

ベトナム語での自己紹介を教えてくださいました。「私の名前は、～です。～歳です。宜しくお願いします。」をベトナム語でなんというのかを教えてください、その後に基本的な挨拶を教えてくださいました。自己紹介を習った後、皆の前で発表したりして練習をした。その後、輪になって日本人学生はベトナム語でベトナム人学生は日本語で自己紹介してその後名前を言い当てるといったゲームをしました。簡単なゲームや実践を通して楽しくベトナム語を学びました。

ベトナム語は日本で少し勉強していった、ベトナムでも同じように勉強をしましたが、一番難しかったのが発音でした。日本語には無いような「ん」ののどの奥から出すような発音が特に難しかったです。発音が難しい分意味を理解する余裕までなく、音を覚えるので必死でした。挨拶は「ありがとう」や「こんにちは」は比較的覚えやすく、その後の生活中も使うことができました。

数字の言い方も日本とは違って、4桁目でピリオドを打って、そのピリオドにも1つ1つ言い方が違っていました。しかし、日本語と共通する点もあり、11のことを「じゅういち」と組み合わせで発音する点は似ていると感じました。

日本語と似ているところ、違うところがたくさんあって面白みを感じました。



IV. 最終発表

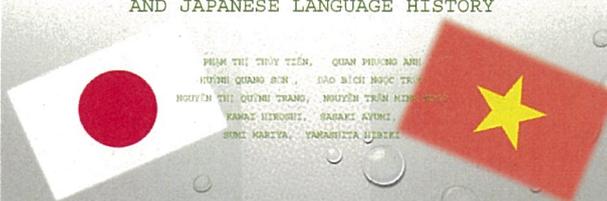
各グループによる最終発表の資料です。

1. 歴史グループ・・・山下響、河合紘志、佐々木歩、隅まりや
2. 教育グループ・・・内田陽菜、坂本京子、中林彩乃、佐藤有紗

(ベトナム学生については巻末資料参照)

ベトナムと日本の 言語史の比較

THE COMPARISON OF VIETNAMESE
AND JAPANESE LANGUAGE HISTORY



FUNAOKI TOSIYUKI, KAWAKATSU AKIHIRO
 NGUYEN THI THUY TIEN, QUAN PHUONG ANH
 HIRAIKI YASUHIRO, DOI BICH NGOC TRAM
 NGUYEN THI QUYNH TRANG, NGUYEN TRAM HINH HONG
 KAWAI HIROSHI, SARAKI AYUMI
 SUNO MARUYA, YAMASHITA UJIEKI

日本とベトナムの相違点

- 日本→簡単にした
- ベトナム→複雑にした
- 加 → か
- 喃 → 口+南
- 奈 → な
- 匹 → 巴+三
- 女 → め

中国の言語ができた理由

考え方や精神を伝えるため

勤労階級が言語を作り、
特権階級が完成させた
→ 支配するため



甲骨文字、金石文の登場

中国から学ぶことへの積極性の違い

日本→能動的

海を渡る
のは危ない、
でも
学びたい!

ベトナム→受動的

中国に
支配された
から
仕方ない



日本とベトナムの共通点

中国の漢字から、独自の文字を作った

かな文字
(ひらがな、
カタカナ)

ノム字

喃(ノム)ができた理由

- 社会における需要
- 仏教を広めるため
- 喃で書かれた原書が明代に焼失したため、
成立した年代は、具体的には
まだわかっていない。

ベトナム語（国語）ができるまで

年代	出来事	備考
938	阮朝の創業	ノム字が使われ始める
1858	西貢の陥落	フランス人が南朝のために使われる
1861	サイゴン条約	ベトナム語が普及するきっかけ
1906	フランスが学校を設立する	上流階級のための言語学習施設
1945	北緯17度線	教育体系の漢字文化を廃止
1950	北部の漢字教育廃止	
1975	南部の漢字教育廃止	ベトナムから漢字がなくなる

相違点②

日本

声調記号がない

イントネーションがある

音の高低差がなく
ても伝わる

例) 明日、私は発表します。

ベトナム

声調記号がある

イントネーションもある

音の高低差がなければ伝わらない

Ngày mai, tôi thuyết trình.

日本語とベトナム語の共通点

①音と意味が同じ: 中国から伝わった言葉

例) 結婚 準備 出発
kết hôn chuẩn bị xuất phát

②文字そのものに意味がない

例) 「あ」、「ア」、「a」

③数詞が同じ

例) 1個 1人 1匹
một cái một người một con

④敬語表現がある

(使い方は違う。)

まとめ（フィールドワークの感想）

国の独自の文字が作られる背景には・・・

日本→おもに1国(中国)のみの影響
ベトナム→複数の国の影響

他国の言語を知ろうとするきっかけ

〈感想〉

・フィールドワークを通して、ベトナムの文字や言語を身近に感じることができた。

・学生同士の交流があることで、お互いにとって良い刺激になった。

相違点①

〈フィールドワークで訪ねた仏教のお寺〉

日本...中国の旧漢字を、読むこと、なんとなく意味を理解することができる。
* 右の写真は「あみだぶつ」と書かれている。

ベトナム...現在、漢字文化がほとんど消えているので、読むこと、意味を理解することができない。



日本とベトナムの教育について

ホーチミン市師範大学 日本語学科
Ngoc Anh, My Duyen, Anh Nhi, Hoang Huy, Le Huyen, Ngoc Yen

三重大学教育学部
坂本京子, 中林彩乃, 内田陽菜, 佐藤有紗

ベトナム教育の歴史

1. 【19世紀以前】伝統教育

中国の影響（えいきょう）を受けた教育文化。
広く使われていた文字は漢字。

ベトナムは中国から侵略（しんりゃく）を受けていたので教育文化は中国と似ていた。



中国語でも
ベトナム語で
もない言葉
なんだよ。



ベトナム教育の歴史

2. 【19世紀中期】社会主義（しゅぎ）的教育

フランス侵略（しんりゃく）による西洋（せいよう）教育の発展。
ベトナム戦争（せんそう）の後のソビエトや東欧（East Europe）
の教育へ近づく。そして発展した。

いろいろな国の侵略により、**横文字**
(alphabet) 文化と
社会主義（しゅぎ）文化が発展した。



このころからベトナムに
アルファベット文化が
取り入れ始めたんだね。

ベトナム教育の歴史

3. 【19世紀後期以降】現代（げんだい）教育

外国の具体的な例を取り入れた教育。
さらに、自国に合った教育方法を選択（せんたく）。

色々な教育方法を受け入れ、その後**ベトナムに合った教育方法**を選ぶようになった

いろいろな国の企業が
ベトナムに入ってきて
日本語も勉強され
始めたよ。



日本教育の歴史

1. 【飛鳥時代】中国の教育文化

日本から中国に使いを送り、帰国した日本人が国民に
中国の教えを伝える

中国独自（どくじ）の教育文化が日本に広まる



日本教育の歴史

2. 【江戸時代中期】鎖国（さこく）による日本独自（どくじ）の文化

オランダ・中国とだけ貿易（ぼうえき）を行う。
それ以外の国との国交（こっこう）をやめる。

他国から影響（えいきょう）を受けることのない**日本の独自（どくじ）の教育文化**が発展した



決められた場所
に決められた人
しか交流できな
かったんだよ。



3. 最終報告の様子

(1) 歴史グループ



(2) 教育グループ



V. 全体の報告（感想）

ベトナムフィールドスタディ全体を通じた
メンバー一人一人の報告（感想）です。

2017年度ベトナムフィールドスタディ参加報告書 感想

人文学部 法律経済学科 1年 山下 響



・出発までの準備

今回のフィールドスタディで、個人的には2度目の海外渡航となりました。高校生の時、今回と同じく学校のプロジェクトの一環として中国の天津に赴いたのが1回目です。12月ごろの渡航であったため、日本の秋田県と緯度が近い天津市は凍えるように寒かったのを覚えています。それに対して今回は赤道に近いベトナム・ホーチミン。前回とは打って変わって、常夏の街に向かうために行った準備について述べます。

まずは夏服の準備です。2月の日本とホーチミンでは気温差が30度ほどありました。当然のことですが、如月の日本では半袖のTシャツを手に入れることが非常に困難です。私は押入れの夏服を引っ張り出してきましたが、洗濯などが大変であったため、この活動への参加を決めた秋ごろの時点で衣服を用意しておくべきだったなと思いました。

次に予防接種についてです。旅行会社のウェブサイトでは、今回のような1週間ほどの短期滞在の場合接種は必要ないとの意見が目立ちましたが、医師に相談したところ日本でも感染の可能性がある破傷風と日本脳炎、また数回の接種で5年から10年の間抗体が有効となるA型肝炎の接種を勧めているとのことだったので、結果その3種を接種しました。

最も心配していた狂犬病は、接種をすべて終わらせるのに半年から1年ほどを要すると医師から説明を受けたので断念しました。今回は何ごとも起こらず済んだのですが、街をうろつく野犬を何頭か見かけました。次回またベトナムへ行く場合は衣服の件も併せて、早めの準備を心掛けようと思います。

・現地での活動について

次に現地での活動について述べます。私は今回の活動を「観光的な活動」と「学習活動」の大きく2つに分類します。前者には中央郵便局、クチトンネルへの訪問や水上人形劇の観賞、ドンコイ通りでの買い物などが、後者にはホーチミン市師範大学の学生とともに行った最終発表に向けての調査・研究、戦争証跡博物館での平和学習がそれぞれ当てはまる

と考えます。

「観光的な活動」で最も印象に残っている訪問先はクチトンネルです。クチトンネルはベトナム戦争時、ベトナム軍が米軍に奇襲をかけるために掘った地下壕のようなものです。訪問時にはガイドに案内してもらいながら当時の兵士の様子、ベトナム軍の奇襲により爆破された米軍の戦車の残骸、高い殺傷能力を持つ罠などを見学しました。当時の兵士たちが撃破した米軍の戦車や不発弾から金属をはぎとり武器に作り替えていたことや狭いトンネル内に数千人の兵士たちが潜伏していたことを聞き非常に驚きました。

さらにここでは実弾射撃も行いました。日本ではまずできない体験です。トリガーを引けば当然ながらモデルガンや緑日の射的には無い衝撃を受け、重量だけではない「重み」を感じました。

「学習活動」では大半の時間をベトナム人学生と過ごしました。日本人の学生がテーマ別に二つのチームに分かれて、それぞれの調査をベトナム人の学生がサポートしてくれました。私はベトナム語の歴史、及び日本語との相違点などについて研究するチームに入りました。活動内容としては歴史博物館に赴いてベトナム語やベトナム文化の起源について調べたり、現在ではほとんど使われなくなった漢字の表記が残る寺社仏閣にも足を運んだりしました。博物館のベトナム表記をベトナム人学生に訳してもらい代わりに、彼らがほとんど読めない漢字を私たちが読んで訳す、といった両者の支えあいで研究を進めていたのですが、私はそれが今回のフィールドスタディの中で最も「異文化交流」を感じた場面です。

また、師範大学の先生方にもヒントをいただきながら無事研究を終えることが出来ました。これを通して、国籍を越えて協力し一つの目標達成に向けて活動することの大切さに改めて気付くことが出来ました。言語の壁や文化の壁といった課題が異文化交流には付き物です。しかし、これらの課題は難しいものであると同時に「両者の歩み寄り相手への思いやりが不可欠だ」という答えがはっきりしているものでもあると言えます。このことが本活動中に一番感じたことです。

さらに、先述した通り戦争証跡博物館において「平和学習」も行いました。名前しか知らなかった「ベトナム戦争」について詳細を知る良いきっかけとなりました。

私は父が長崎出身で、長崎の平和記念館を訪れたことがあります。今回赴いた戦争証跡博物館と同様に戦争の悲惨な状況や実際の重火器の展示、資料の公開がされているのですが、入館前に先生がおっしゃっていたように、ベトナムの人々は戦争について未来への前向きな気持ちを持っていると感じました。日本ではこれからを考える、というよりも過去の過ちを振り返るだけのことが多いような気がします。ベトナムの人々が過去を顧みたと上で、これからどのように平和を維持していくか、平和の大切さを次世代に伝えていくかと考えている点について日本も見習うべきだと思います。

・グループ活動について

上で述べたように、グループ活動では日本人が研究テーマごとに分かれて、それぞれにベトナム人学生がついてくれました。始まる前はコミュニケーションの面や、考え方の違いで研究が上手くいくか心配だったのですが、いざ始めてみると彼らはすごく積極的に活動に参加してくれました。時間の都合上あまり高度な調査はすることが出来ませんでした。総評としては、グループ調査は大成功であったと思います。

良かったこととしてはやはり、学生が皆意欲的に取り組めたことだと思います。当初は行程に入っていなかったのですが、ベトナム人学生が提案してくれたおかげで日本人では到底知りえなかった寺院や仏閣を訪問することが出来ました。さらに、ベトナム語の歴史について文献を探したいと考えていたところ、彼らはホーチミン市の図書館にも案内してくれました。もちろん、文献はベトナム語で書かれているので彼らに翻訳をお願いしたのですが、それらのタスクもこなしてくれました。今回の調査は本当に彼らの親切さや向上心、積極性に助けられたと思います。

対して、大変だったことは会話についてです。今回お世話になったのは日本語学部の皆さんだったので、皆さん日本語が上手でした。しかし、日本語特有の表現や専門用語を伝えるのは難しく、しばしば英語やジェスチャーを織り交ぜてコミュニケーションをとる必要がありました。このとき、ベトナムに来ているのに私たちは日本語しか話せないということにふがいなさや情けなさを感じました。「郷に入っては郷に従え」という言葉がある通り、今回は私たちがベトナムへ訪問したのだから、基本的なベトナム語の習得は必要であったと思います。

・感想、成長できた点

今回のフィールドスタディは非常に密度の高い、有意義な 8 日間だったと感じます。出発前は気候や治安、食べ物など多くの心配がありました。しかし、いざ赴いてみると不安がすぐに無くなりました。もちろん油断は禁物ですが、「病は気から」ということわざもありますし、心配しすぎもよくないと学びました。

訪問先の大学で「ベトナム人は勇気と知識の量を第一と考える」と教わりました。勇気を持たなければ前には進めません。勇気がなければ車通りの多いドンコイ通りを横切ることにはできませんし、ベトナム語で書かれた様相が分からないメニューを直感で注文できません。この 8 日間でそれはずいぶん鍛えられたと思います。知識に関しても、ベトナムのちょっとした裏事情から国家を揺るがせた戦争の歴史まで、多くの事を学ぶことが出来ました。

さらに、書ききれませんでした。ホームステイもとても貴重な経験となりました。ホストとして快く私たちを受け入れてくれたホストファミリーの皆さんにも感謝しています。

この旅でベトナムがとても好きになりました。すぐにでも、また行きたいと思っています。このように思えるのは無事に帰ってくることが出来たからです。そのために尽力して

くださった三重大学の先生方や職員の皆さん、ホーチミン市師範大学の皆さん、そして旅を盛り上げてくださった先輩方や同級生に今一度感謝を伝えたいです。

感恩！ ありがとうございました。

ベトナムフィールドスタディを終えて

人文学部 文化学科 1年 河合 紘志

私が今回このベトナムフィールドスタディに参加した理由は、友達に誘われたからである。私自身はこのようなプログラムがあるということを知らなかったのだが、友達にベトナムに行こうと誘われ、自分も大学生の間に海外に行ってみたいという思いもあり、このプログラムに参加した。

行くと決まったのはいいのだが、ベトナムについてほとんど何も知らなかった。知っているのは、フォーと、民族衣装のアオザイ、そしてベトナム戦争くらいである。首都がなんという都市なのか、日本との時差がどれくらいあるのかということすら知らなかった。これではいけない、勉強しなければと思い、書店などで本を探したり、インターネットで検索したりした。どんな宗教が信仰されているのか、人口はどれくらいなのか、気候はどうなのかについて調べた。また、自分にとって海外に行くことは初めてであったので、ワクワクする反面、ドキドキと不安でいっぱいであった。事前に行われた安全講習会では色々と怖い現実を突きつけられ、果たして生きて帰って来ることが出来るのであろうかというくらいまで考えてしまっていた。

それまでの事前研修ではベトナム語などを学んだが、発音がとても難しく、非常に苦勞した。それでも、自己紹介程度は頑張って覚えようとし、現地の人に通じた時はとても嬉しかった。現地でその国の言葉が通じることの喜びを非常に感じた。

荷物の準備なども大変であった。ホテルで洗濯ができなかった場合の予備の服の準備やお金の準備、パスポートの申請などを重量オーバーにならないように用意しなければならなかったのが私にとっては大変なことであった。しかし、行きの際に既に重量ギリギリであったので、当然帰りの荷物では重量オーバーになってしまった。自分がどれくらいのお土産を買うのかなど、そういった点も考慮して荷造りをしなければいけなかったというのも今回のフィールドスタディで学んだことの1つであるかもしれない。

ベトナム語が話せない、読めない、書けない、の三拍子が揃っている中でベトナムに行って果たして目的を達成できるのか非常に不安であったが、ホーチミン市師範大学の学生が日本語学部で多少は日本語が話せると聞いて安心した。ただ、彼らが頑張って日本語で難しい話をしてくれているのに、私たちはベトナム語を話すことができないことへのもどかしさはあった。

ベトナムでホテルや市場、商店など様々なところに行ったなかで感じたのが、英語は全世界共通で、ある程度ならコミュニケーションをとることが出来る優れものだなと実感した。また驚いたことに、市場や商店の店員さんが、私たちを見るなり日本語で話しかけてきた。「お兄さん、これ安いよ」「これとこれセットで〇〇円ね」と言ったように話しかけられた。一体どこでこんなような日本語を覚えたのだろうかと思議に感じる日々であっ

た。

私たちのグループはどうしてベトナムから漢字が消えたのかということについて調べを進めた。日本もベトナムもかつては中国の影響を受けた漢字文化圏であった。言語という点では、日本もベトナムも昔は漢字を使用していた。時を経るにつれて、日本では漢字を簡略化して表す「ひらがな」「カタカナ」というものが出来上がった。現代では漢字、ひらがな、カタカナをうまく使い、日本語を表記している。これに対しベトナムでは、漢字を難しくした「チュノム」というものを発明した。日本語では漢字を簡略化したのに対し、ベトナムではなぜわざわざ難しくしたのか非常に疑問であった。その疑問は、師範大学の先生の講義



を聞いた中で解決した。実際に仏教寺院を訪問し何かヒントはないか探したり、図書館で関連する書籍で調べたりした。その際、ベトナム人学生が日本語に訳してくれ、時には英語で私たちにわかりやすく説明をしてくれた。

滞在中に日曜日が一度だけあり、その際は自分たちでタクシーを使い様々な観光スポット巡りをした。その際は、ベトナムの民族衣装の「アオザイ」をレンタルし、アオザイを着たまま観光を楽しんだ。



私にとって今回のフィールドスタディが初の海外渡航になり、非常に不安な面もたくさんあったが、行ってみてとてもいい経験となった。事前研修はそんなに大変ではなかったので負担になることもなかった。実際に海外の文化に触れ、様々な経験をして、日本では当然だと思っていたことが当然ではなかったりするなど、色々と学ぶことが多かった。日本に帰国してからベトナムの写真を見るたびにまた行きたいと思えるような素晴らしい国だと感じた。

ベトナムフィールドスタディの感想

人文学部 文化学科 2年 佐々木 歩

・参加の動機

一番大きな理由は、自分の専攻地域がアジア・オセアニア地域であるため、アジア圏の国々の文化に興味があったこと、実践的なフィールドスタディをしてみたいと感じたことです。また、私はこれまで海外へ行くことへの不安が大きかったため、なかなか一歩を踏み出せずにいましたが、学校の計画であれば安心だ、と思い参加に至りました。

・出発までの準備

日本は冬でしたが、ホーチミン市は1年中温かい国なので、荷物は比較的少なく済みました。私は洗濯するつもりで少なめに持って行ったので、ほかの人より荷物は軽く、お土産もたくさん入りましたが、ホテルで洗濯できなかった場合、大変なことになっていたと思います。洗濯はホテルによるとは思いますが、今回泊まったホテルは、追加料金で洗濯をしてくれました。次からは、服や下着は多めに持っていこうと思います。持って行くべきものは、フリーWi-Fi、変換プラグ、タコ足配線、小さめの財布です。

・現地での活動、考えたこと、重視したこと

現地では、ホーチミン市及びベトナムの歴史、文化を中心に観光地や博物館などを回ったり、ホーチミン師範大学で講義を聴いたりし、師範大学の学生と協力してフィールド調査を行いました。ベトナムの歴史について、博物館で実際に見ることで分かりやすく理解することができ、講義で聞くことでより深く理解することができました。ベトナム人学生は日本語をとってもよく理解してくれていたのも、あまりコミュニケーションに問題はありませんでした。正しい日本語で、正確に相手に伝えることで、相互理解ができると思います。方言や最近の若者言葉にも気を付けて話すように心がけました。私たちの日本語も少しきれいになったのではないかと思います。また、日本語が伝わらない場合に英語を使用することがあったので、わずかですが英語を話す機会もあったので、やはり英語は大切だと感じました。

・グループ活動

師範大学の学生がフィールド調査のための神社を探しておいてくれたり、積極的に話しかけてくれたりと、向こうから交流を図ってくれたのでお互いに進行状況をうまくまとめながら話を進めることができました。私たちのグループは、ベトナム語の漢字文化をテーマに調べ、日本語とベトナム語の共通点、相違点をまとめることにしました。その点において、学生間の交流には、お互いの言語についてより深く知ることがで

きる良い機会だったと思います。また、発表も、ベトナム人学生が、私たちの作った原稿を一生懸命日本語で発表してくれたので、良い発表になったと思いました。

また、日本人学生同士は、数回顔を合わせただけですぐフィールドワークとなるので、最初は不安がありました。すぐに仲良くなることができ、良いチームワークだったと思います。私たちは研究にあたって、小さいグループを2つ作って調べることにしましたが、最後にまとめるときに、自分と反対のグループの内容をあまり深く理解することができなかつたため、もう少し調査に時間があればよかつたなと感じました。

グループでの活動は、先生があまり手を貸しすぎることもなく、双方の学生が主体となって動くことができたので、日本人の私たちだけでは気づくことができなかったような点に気づくことができました。とても有意義な研究だったとおもいます。

・全体の振り返り

私にとって1週間以上の海外渡航は初めてだったので、行く前はとても緊張していましたが、一緒に行った7人の学生と2人の先生に助けられ、9日間とても楽しく過ごすことができました。サイゴン大教会、中央郵便局、ベントイン市場などの観光名所も回ることもでき、水上人形劇を見て、ベトナムの文化を実際に見ることができ、博物館やクチトンネルはベトナム戦争の歴史を誇り高く語り継いでいました。自由時間にはドンコイ通りでショッピングもでき、念願のアオザイを着ることもできました。フィールドスタディ以外にもたくさんベトナムの魅力を堪能でき、とても楽しかったことがまず一番の思い出です。

写真：現地の衣装（アオザイ）

本題のフィールドスタディは、師範大学学生協力のもと、自分たちの調べたいことが何とか形になってまとめることができたので、自分なりに満足いく結果でした。言語の違いを調べるにあたって、二つの言語比較の場合は、その両方の言語をよく理解する必要があります。しかし、私たちはベトナム語が全く



分からない中での研究だったため、私たちだけではこの研究は不可能でした。この企画においては、ベトナム人と日本人が協力して得ることができた結果にこそ大きな価値があると思います。その点で、私たちの研究はとても良いものであると感じます。時間がない中での研究となりましたが、その限られた時間を有効に使うことができた

と思います。

また、自分の知らない文化を知ることは、とてもおもしろいことであると感じることができました。ベトナムの学生が日本の文化を面白いとってくれているように、私もベトナムの文化が面白いと感じることができました。他の国々の文化はどうなんだろうと考えると好奇心がわいてきます。私はこれまで外国の文化にあまり興味はないと思っていましたが、このフィールドスタディを通して、もっとアジア各国の文化を理解していきたいと思うようになりました。

写真：ベトナム人学生と

たくさんのことを見て、聞いて、体験して、学生のうちにこういった体験が一つでもできてよかったと思います。また、他国の学生とのつながりができたことも私にとってはプラスなことでした。まだ SNS を通して連絡を取っている学生もいるほどです。貴重な体験をさせてもらった上に、人脈まで広がったと思うと、思い切ってこの企画に飛び込んでみて本当に良かったと思



います。時間があれば、来年もこのプログラムに参加したいと思います。引率してください先生がた、ありがとうございました。

ベトナムフィールドスタディ 2017 報告書

人文学部 文化学科 2年 隅 まりや

全体を通じた感想

幼い頃からどこかアジアっぽい雰囲気のものが好きで、大学に入ってから中国語を熱心に勉強したり、台湾に二度旅行に出かけたりしていた私は、いつしか東南アジアも訪れてみたいと思っていた。そこで今回のベトナムフィールドスタディに参加し、ベトナムの風俗・習慣や気候などを自らの五感で感じてこようと考えたのである。

出発前に不安だったこと

フィールドスタディに申し込む前から楽しみにしていたベトナムだが、行く前に不安になっていたことが三つあった。

まず一つ目は、言語についてである。ベトナム語は日本での日常生活において、耳にすることもなければ（そもそも聞き取ることもできない）、目にする機会も少ないため、なじみの薄い言語だというイメージがあった。知らない単語であっても漢字からなんとなく意味の推測できる中国語とは違う。そのためベトナムで生活するとなると、言葉がほとんど理解出来ず、また通じないのではないだろうかという不安があった。事前研修の際、簡単な挨拶や数字のいい方は少し練習したが、発音が独特でとても難しく感じた。また英語があまり通じないと聞いていたため、大切なことが伝わらない場面に遭遇したらどうやって切り抜ければいいのか、とっていた。

二つ目は、食べ物についてである。大学1年の夏に初めて台湾に行った時は、烏龍茶や緑茶に砂糖が大量に入っていて飲むことができなかつたり、「八角」など匂いも味もクセが強い調味料を使った料理が多く、食に関してはストレスを感じたりするほどだった。だが、他に行ったことのある北京や韓国で食べた料理はさほど口に合わないとは感じなかった。同じ中国でも南方では料理に砂糖をたくさん使うと聞いたおり、ベトナムも南の方の国だから味付けも似ているのではないかと思いついていたため、食生活に対する不安はなかなかのものであった。さらに私はパクチーが大の苦手であり、ベトナムではこれを使った料理は絶対に避けたいと思っていた。

三つ目は、ホームステイについてである。本ベトナムフィールドスタディでは、一泊だけ日本学科の学生の家でホームステイをする機会があった。私はこれまで人生で一度もホームステイを経験したことがなく、心配なことだらけであった。それには上で述べた、言語と料理への不安が大きく関わっている。まず、日本語学科の学生がいてくれるにしても、家族の方と言葉が通じ合わないと互いに不便に感じる事があるのではないだろうか。また、もし出して頂いた料理が口に合わなかった場合、失礼なくきちんと食べることができるだろうか。それらが、ホームステイ前に抱えていた最も大きな心配事であった。

しかし、いざベトナムでの生活がスタートすると、これらの不安はいつのまにか全て解消されていた。言語については、確かに街の看板を見ても文字の示す意味は理解できないし、街で飛び交うベトナム語の会話はもっとわからなかった。だが普通に生活することは十分にできる。こんなことを言ってしまうと事前研修で学んだベトナム語があまり生かせなかったということになりかねないが、指で「1」や「2」の数字を出して、レジスターに表示された金額さえ読むことができれば食事も買い物も問題なくできるのだ。これでもう未知なる国でも生きていけるという確信を持たせた気がした。もし通じなくてもジェスチャーで何とかなる！もちろん言葉が通じた方が便利だと思う事もあるので(「パクチーを抜いて下さい！」など。「パクチー」は現地では通じず苦勞した)、やはり事前に数字の言い方や実用的なフレーズの練習に時間を割くことは決して損ではないと感じる。こまめな言語学習の重要性も再認識させられた。

そしてベトナムの料理は、おいしい！いや、正確にいうと「おいしい」というよりは「問題なく食べることができる」と言いたいところである。味付けの特徴としては、一概に非常に淡白で、パクチーなどが入っていない限りクセがないのだ。また香草や調味料は、自分で好きな分だけ入れて調整出来ることが多い。



レストランで初めて食べたフォー



伝統的な家庭料理

実際に現地で驚いたこと

いちばん驚いたのは、日本に比べると異常なほどの物価の安さである。交通費(タクシーの料金)、滞在費(ホテル代)に困ることは決してなかった。もちろんこれは信頼できるタクシー会社を教えて頂いたり、宿泊先の手配をしてくださったりした先生方のおかげである。そしてモノにはよるが、食費やお土産代も安い。普通の食事であれば数百円以内で楽しむことができるし、1食が百円もしない場合すらあった。コンビニエンスストアで買える500ミリリットルの水も1本5000ドン(=約25円)と、日本の4分の1以下である。あまりに安いので、日本に戻ってからは食事代の高さに失望するのではないだろうかと心配になるほどであった。また以前から興味があったベトナムビールは、安いうえに飲みやすくして重宝した。私はビールのホップの効いた苦い味が苦手なのだが、ベトナムのビール

は比較的薄味でとてもさりとしていた。低価格でバーベキューを楽しめるビアガーデンもあり、非常によかった。そしてなによりも、雑貨屋を見て回り買い物をするのがいちばん楽しかった。ドンコイ通りには、まさに私好みのアジアンテイストでかわいい雑貨が溢れており、ウインドウショッピングをするだけでも幸せな気分になった。しかし、ベンタイン市場で購入したサンダル（確か60万ドン程度）が、ガイドブックには8万ドンと記載されているのを後で見つけた時は少なからず落ち込んだ。だが、ベトナムに降り立って金銭感覚の狂った日本人観光客をターゲットにたくましく商売をしているベトナム人たちの姿も、客観的に見れば面白いとは思った。なかなか日本では見ることのできない、パワーに溢れた光景であった。

そして、フィールド調査の歴史チームとして何軒かの寺院を訪れたが、仏像の周りの装飾が日本とは印象が全然違って、とても興味深かった。下図のように、仏の後ろの「気」のようなものが、まるでパチンコ屋やゲームセンターに陳列された機械のようにカラフルに光っていた。色彩の変化があるので見ているだけで楽しかった。ただ、キラキラした印象なのに、場の雰囲気は日本のお寺と同じように基本静かで厳かだったのがシュールに感じ、おもしろいと思った。



また、ホーチミン市師範大学で日本語学科の学生たちと交流したが、ベトナムの学生たちの勤勉さにはとても頭が上がりなかった。一緒にフィールド調査や発表の準備を行ったベトナム人学生は1年生が多かったが、まだ日本語を勉強し始めて1年にも満たないというのが信じられないほど自分の考えを日本語で表現するのが上手で、私たちの言葉を一生懸命理解しようとしてくれた。みんなとても努力しているのだなと痛感し、深く感心した。このとても勤勉な若者たちが、将来社会に出て活躍するとなると、ベトナムの今後の発展はいかなるものになるのだろうか。

研修後、自分がどう変わったか

私がベトナムフィールドスタディを終えて自分の中に最も強く感じている変化は、「生きる力」が増したという点である。ベトナム戦争で多くの戦死者を出し、若年層が主な社会の担い手となっているベトナムをこの目で見て、懸命に今日を生きて街を動かしているそのエネルギーに圧倒された。過酷な交通量にはやはり驚愕したが、交通事故は一度も見か

けなかった。バイクに乗って学校や職場に行くという、自分たちと同じ人々を互いに思いやる、ベトナムの人々の心の余裕が垣間見えた。こうした思いやりや助け合いがないと、よりよい治安や社会を築いていくことができないであろう。学業にも商売にも懸命に、積極的に取り組むベトナムの人々のパワーは、勉強にも仕事にも消極的になりがちな現代日本の若者社会では得ることができないだろうと思った。それだけでなく、たとえ言葉が通じなくたって必死でジェスチャーをすれば何とかなる。食べ物だっておそろおそろ食べてみたら案外おいしい。こうしたベトナムでの経験を通して、自分のバイタリティーが強くなったことをひしひしと感じている。台湾や中国、韓国にも行ったが、私はもし日本以外の国で長期的に住むならベトナムがいいなと今のところ思っている。

ベトナムフィールドスタディ報告書

教育学部 理科教育コース 2年 内田 陽菜

私がこの研修に参加したきっかけは、おもに3つありました。1つ目は2年生前期の授業でホーチミン市師範大学の学生と一緒に活動する機会があり、そのときの学生の学ぶ姿勢が積極的で非常に印象的だったからです。彼らの学ぶ様子を見て、どうしてこんなに一生懸命に学ぼうとできるのだろう、どういう教育を受けたらこんなふうに積極的になるのだろう、と感じ、実際にベトナムに行ってみてみたいと思うようになりました。2つ目はその授業と一緒に活動した学生と仲良くなり、授業内容だけでなくベトナムや日本の文化、日本に来て驚いたことなど様々なことを話し、その中でベトナムという国に興味を持ち、ベトナムの文化、歴史について知りたいと思ったからです。3つ目は、この研修が全学の研修だったため、他学部の学生とも関わりを持つことができ、自分の考えを深めるよい機会になると考えたからです。

出発までには去年この研修に参加した先輩に荷物がどんなものが必要か聞き、むこうで困らないように気をつけました。特にポケット wi-fi はなかったら困ったと思うので聞いておいてよかったと感じました。

今回のプログラムでは、教育について調査するグループと歴史について調査するグループに分かれてホーチミン市師範大学の学生とともにベトナムと日本の違いや共通点について調査を行いました。私は教育グループだったため、幼稚園と中学校を訪問させていただき、それを元にプレゼンテーションを行いました。また、ホーチミン市師範大学日本語学部の学生たちが、フィールド調査だけでなく観光やベトナム文化の授業でもずっと一緒に行動してくれ、彼らと関わり、ホームステイも経験し、ベトナムの文化やベトナム人の考え方に触れることができました。

まず、はじめに学校訪問について述べたいと思います。訪れた幼稚園はインターナショナルスクールだったためベトナム語だけでなく英語でも授業が行われていました。その際にはベトナム語と英語を使い分け、子どもたちが混乱しないように工夫されていました。日本でも早期英語教育について、日本語もままならないのに英語を教えてしまっただけでは二つの言語が混ざってどっちつかずの状態になるのではという問題が指摘されています。それについても教育グループのメンバーで話し合いました。話し合いの結果、英語の授業を英語で行うことには全員賛成だが、早期にそれを行うのは意見が分かれました。同じ教育学部の学生でも考え方がそれぞれで、よい刺激になり、自分の考え方を見直す機会になりました。また、子どもたちの英語を上達させるために、英語を楽しむことができる環境を整えていることも印象的でした。たとえば、子どもたちの好きな歌やダンス、絵本を使って英語学んでいる様子が見られました。子どもたちは、とても楽しんでいる様子で、英語を話すことがすきなのだなと感じられました。先生も、習得程度に差のある子どもたちに対

して、子どもたちの発言を尊重して、さりげない支援をしているように見え、英語が好きになれる環境が整えられていると感じました。

次に訪問した中学校では英語の授業が週に 11 コマと日本と比べて多いこと、優秀な生徒は名前や写真が掲示されること、優秀な生徒は特別なプログラムを受講でき数学を英語で受けてたり、理科ではより発展的な実験に取り組んだりする様子が見られました。これらのことから、ベトナムでは優秀な生徒がどんどんのびるしくみが整えられていると感じました。ベトナムとは反対で、日本では補習が行われていたり授業も理解が遅れている生徒に合わせて行われる事が多いと感じます。それぞれにより点悪い点があり、どちらがよいとも言えないけれど、日本はベトナムのように優秀な生徒がもっと伸びる仕組みを整える必要があると感じました。また、ベトナム人学生と関わる中で、ベトナム人学生に高校生の時に放課後に塾に通っていたかどうかきくとほとんどの学生が塾に通っていたと答え、大学に行くには塾に行かなければならない、と言っていたのが印象的でした。そして、大学を卒業しても就職率は 65% でほかの人と違うことをしないといけないから難しいと言っていました。このことから、ベトナムはとても競争社会なのだと感じました。ベトナムの学生の学ぼうとする意欲が強く、積極的なのはその影響も少なからずあるのではないかと感じました。いづれにしても、ベトナム人学生たちは学ぶことに対して積極的で、私たちは見習わなければならないと感じました。

グループ活動では、やはり言葉が通じなくて、話していることが理解できないことが一番難しかったです。お互いにわかりたい、伝えたいと思っているのに伝わらないもどかしさを感じました。しかしボディランゲージと翻訳機能をフル活用して頑張りました。





次に、ベトナム人学生やその家族と関わる中で、ベトナムの文化やベトナム人の考え方に触れることができたことについて述べます。

ホーチミン市師範大学日本語学部の学生たちは、フィールド調査だけでなく観光やベトナム文化の授業でもずっと一緒に行動してくれました。博物館ではベトナム語を日本語に訳して説明してくれ、カフェテリアでは私たちの代わりに注文してくれました。彼らのおもてなしに感動し、私もベトナムの学生が日本に来たときは彼らにおもてなしを返せるようにしたいと感じました。

ホームステイでは、彼らと関わり、ホームステイも経験し、ベトナムの文化やベトナム人の考え方に触れることができました。グループ活動でも言いたいことが伝わらないもどかしさを感じましたが、ホームステイでは特にお母さんはベトナム語しか話せなかったのので、表情とボディランゲージを駆使してコミュニケーションを取りました。言語が違ってもお互いが伝えたい、相手の言っていることを知りたいと思えばコミュニケーションを取ることができることに喜びを感じ、楽しく過ごすことができ、とても感謝しています。



この研修を通して、さまざまなことを学ぶことができ、改めて相手のことを考えて行動することの大切さについて考えました。言葉の通じない人、通じにくい人に対してどういう風に接するべきなのか考えて行動すること、彼らがしてくれたおもてなしも相手のことを考えているからできることだと感じました。私も相手のことを考えて行動できる人になりたいと思いました。

ベトナムフィールドスタディ感想

教育学部 英語教育コース 2年 坂本 京子

私は教育学部の英語教育コースに所属しており、異文化に興味がありました。昨年の夏季休暇に親戚とイギリスへ、また教育学部のプログラムでニュージーランドへ行きました。どちらも本当に素敵な国で、有意義な経験ができたので、もっと様々な国に行ってみたいと考えるようになりました。そこで、このベトナムフィールドスタディのお話を耳にし、ぜひ参加したいと思いました。中でも参加の決め手となったのは、プログラムを通して現地の学生と多くの交流をもつことができるということです。大抵の海外研修やプログラムでは、その国へ行っても結局日本人同士で授業を受けたり活動したりすることがほとんどで、現地の学生と交流をもつことはあまりないと思います。実際、学部のプログラムで参加したニュージーランド海外研修では、ほとんどの授業が日本人学生のみでした。しかしこのベトナムフィールドスタディでは、ホーチミン市師範大学の日本語学部の学生と三重大大学の学生でグループを組み、ベトナムについて気になることや興味のあることについての調査を一緒に行ったり、学生の家ホームステイを行ったりすることで、現地の学生と豊かな交流をもつことができました。また、ベトナムは日本と友好関係にあり、ベトナムの発展はめまぐるしいものです。その発展を実際にベトナムに行ってみて感じてみたいと考えました。

出発までに大した準備はしていませんでしたが、ベトナムは日本に比べて衛生状況が悪く、ひったくりが多いということには注意を払っていました。衛生状況に関しては、日本で消毒スプレーやお手拭きタオル、マスクを買い、ひったくりに関しては、鞆を選んで持っていくなどしました。

ベトナムの8日間の研修は本当に楽しく有意義なものとなりました。一緒に行った日本人学生7人と、プログラム中の自由時間は全て一緒に過ごすほど仲良くなりました。ベトナム人学生もとてもやさしく、私たちがどこかに出かけるときには必ずついてきてくれて、通訳をしてくれたり、押し売りなどに困っているときには助けてくれたりしました。引率の先生方も私たちの活動がより有意義なものとなるように尽力してくださり、海外という日本よりも様々なリスクが高い場所で、非日常的な体験をして浮かれていた私たちを安全に引率してくださいました。この研修が人生で一番というくらい楽しく有意義なものとなったのは、第一に8日間のこの研修中に、日本人学生、ベトナム人学生、引率の先生方に恵まれたからだと思っています。

現地での活動は、観光と、ホーチミン市師範大学の日本語学部の学生とのフィールドスタディの2つに大きく分けられました。ベトナムフィールドスタディとして来ているので、あまり観光はできないと思っていましたが、サイゴン大教会、郵便局、歴史博物館、ベンタイン市場、ドンコイ通り、統一会堂、水上人形劇、クチトンネル、歴史証跡博物館など、

たくさんのお店に行くことができました。また、観光の際についてきてくれたベトナム人学生と話をしたり、質問をしたりして、普通にベトナムに観光をしに行くよりも有意義な体験ができました。さらにベトナム人学生のおすすめのお店や場所に行くこともでき、ベトナムの大学生の日常を体験することができました。中でも印象的なのは、大学での活動の後に、みんなで大学近くのアイスクリーム屋さんに行ったことです。ベトナム人学生に囲まれて総勢 20 人ぐらいでアイスクリームを食べて、現地の大学生になったような気分になれました。観光のために設けられた時間以外にも、毎日門限の 22 時までめいっぱい出かけて、おいしいものを食べにいたり、気になったところに行ってみたり、買い物をしたりしました。ベトナムのタクシーは非常に安いので、時間さえ許せばどこへでも行くことができました。中でもドンコイ通りには足しげく通り、かわいい雑貨が売ってある店、ジャスミンティーのおいしい店や、日本人がやっているかわいいレストランなど、店員さんに顔を覚えられるほどの常連客に



になりました。ベトナムは日本に比べはるかに物価が安いので、毎日富豪のような気分を味わえました。半日自由時間だった日は、みんなでアオザイを着て Tan Dinh Church(タンディン教会)や、sri thendayuthapani temple(スリ・タンディ・ユッタ・パニ)に行き、写真を撮りました。毎日が修学旅行のような、バカンスのような、普通にベトナムに旅行に行っても味わえないよ

うな経験をすることができました。

フィールドスタディでは、私たちは教育学部であり、ベトナムの教育にも関心があったので、教育グループに所属しベトナムの教育について調べました。実際に国際的な幼稚園と、中学校に訪問し、ホーチミン市師範大学でも日本語の授業を受けました。教育グループで一緒にベトナム人学生が、ベトナム語でベトナムの教育の歴史などを調べてくれて翻訳をしてくれたりしました。幼稚園も中学校も、日本人である私たちをあたかも芸能人かのように歓迎してくださり、ベトナムがいかに日本に対して友好的であるかを感じることができました。日本の学生であれば、学校に外国人が訪問したら何を話しているかわからずに黙っていることがほとんどだと思いますが、ベトナム人の学生は競いあうように質問をしてくれたりコミュニケーションをとったりしてくれて、日本の教育の弱みを見たような気がしました、実際に英語力でいうと、日本はベトナムには劣ってはいませ

んが、ベトナム人のほうがよく英語を話せるそうです。これは、ベトナム人の持つ積極性のためであると考えました。日本も英語を指導する際に、英語力だけを鍛えるのではなく、積極的にコミュニケーションをとろうとする姿勢を育まなければいけないと強く感じました。

また、このプログラムの中盤では一泊のホームステイも体験しました。私は日本語学部の1年生の女の子のもとで1日すごしました。三か月しか勉強していないのに、私はほとんど不自由することなくコミュニケーションをとることができたので、自分はどうして英語が上達しないのか悲しくなるほどでした。その女の子の家族は、言葉も通じない私に優しくしてくれました。一緒に市場に買い物に行き、その材料で春巻きを作って食べました。市場では野菜がゴロゴロとそのまま置かれていて、これと指をさすとその場でお店の方がナイフで皮をむいて使いやすい大きさに切って渡してくれました。お肉も同じように、切り株の上でナイフを使ってたたいて分けて渡してくれました。普段私は食べ物をスーパーで食品を買っていたので、正直この市場での光景は衝撃的でした。私



は、ベトナムはみんなが今を生きているという感じの強い国であると感じました。市場では野菜やお肉がそのままゴロゴロと売られていて、必要な分だけ切り渡して売る、ということもそうですし、食器を洗う時も外でためた水をつかっていました。日本では設備が整いすぎて気が付きませんが、生きていくうえで必要なことはシンプルなことではないかと思えます。働いてお金を稼いで、それで物を手に入れ、ごはんを食べて生きていく。日本にいと、どうしても視野が狭くなってしまいます。ベトナムは発展途上なところがあるからこそ、みんなが生き生きと生活していて、楽しそうでした。日本人からするとそんなことだと思うことにも幸せを感じ、笑顔になっていました。そういった姿をみて、恵まれているからといって幸せなわけではないのだと強く感じました。

ベトナムフィールドスタディにおいて困ったことももちろんありました。大きくは言葉の壁です。私たちはまだ英語は読めてもベトナム語は一切読めません。日本で調べ学習を行う際にはまず図書館やインターネットで情報収集を行いますが、それらが全てベトナム語で、英語や日本語の文献はありませんでした。ベトナム人の学生に学校についての質問をしても、学生によって言っていることが矛盾しており、どの情報が正しいのかを図る物差しのような確かな情報もなかったため、調査が難航したこともありました。また、ベトナム人の学生にわかってもらえるように簡単な日本語を話しすぎて、本来と大きく意味の異なる日本語になってしまうこともありました。そのような困ったこともありました。ベトナム人学生の助けがあり、最終的にはプレゼンを完成させることができました。文献による情報収集は私たちだけではできなかったため、ベトナム人学生の方が進んでわかり

やすく訳してくださいました。自分はわからないからやらない、ではなく、お互いが力を出し合っているものを作ることができたのではないかと思います。

このベトナムフィールドスタディに参加して、世界は自分が思っているよりも広くて暖かく、自分の今住んでいる世界がすべてではないと感じました。ベトナムに行く前のベトナムのイメージと言えば、汚い、治安が悪いなどあまりよくないものの方が多かったです。また、友人にベトナムに行くというと、大抵は大丈夫なのかという心配の声が返ってきました。ホーチミン市師範大学の先生がおっしゃっていたように、自分の国よりも発展途上の国に行くということは勇気のいることです。しかし、実際に行ってみるとこの研修で出会ったベトナムの方はみな優しくしてくれました。どこかへ行くときはついてきてくれたり、言葉の通じない私たちが不自由のないように力を尽くしてくれたりしました。日本では何かをするとお礼を求めたり、反対に何かをされると何かし返さなければいけないのかと思ってしまったりすることがあると思います。確かにそれも日本のいいところではあります。しかし、ベトナムでは見返りを求めないやさしさというものに触れることができました。環境や設備が整備されていなくても楽しく幸せに生きていけるし、言葉が通じなくてもなんとかわかりあったり友達になったりすることができます。日本にいと忙しく、その代わりに便利なものが増えて視野が狭くなってしまうと思います。何かに行き詰ったときには、自分の住んでいる世界だけではないのだと視野を広くもっていきたいです。少しのことではへこたれず、少しの不足や不自由に不満を持つのではなく、楽しんでいこうと思いました。また、困ったことやできないことに直面しても、自分には何か少しでもできることがあるはずなので、時には力を合わせて問題を解決していくことが大切であると心の底から感じました。そしてベトナム人学生のように、見返りを求めずに人にやさしくしていきたいと思います。そして、さらにいろいろなところに行って、いろいろな世界を見てみたいと思いました。そしてまたベトナムにも、できればこの8人でいきたいです。本当に楽しく有意義な8日間になりました。ありがとうございました。

ベトナムフィールドスタディに参加して

教育学部 英語教育コース 2年 中林 彩乃

私が今回のベトナムフィールドスタディに参加すると決めたのは、同じ学科の坂本さんが説明会と一緒に一緒に行こうと誘ってくれたおかげです。私は今年の春休みに大学主催のイギリス短期語学研修に参加して、初の海外経験をしました。そのときに、日本とは違う街の風景、人々の生活様式や文化など、様々なイギリス独特のものを目にしたり、体験したりしてとても新鮮で面白かったことを覚えています。また、二年生になってから外国での教育を学ぶ機会があり、もっと色々な国の教育を知りたいという気持ちが芽生えました。今思い出すと、外国へ行ってみたいという単純な気持ちと、外国の教育への興味から、私はベトナムフィールドスタディに参加しようと思ったのだと思います。また、いつかアジア圏の国に行ってみたくて思っていたことから、このフィールドスタディならベトナムで観光だけでなく、勉強でき、大学からの資金的な補助が出るという魅力的な点にも惹かれたことも、大きなポイントだったと思います。

私はベトナムについてほとんど知識がなく、知っていたのはベトナム料理のフォーやベトナム戦争があったという事実くらいでした。そのため、事前のフィールドスタディの勉強会で少しずつベトナムについて知っていくうちに、ベトナムへ行きたいという思いが高まってきました。

11月頃にベトナムフィールドスタディに参加すると決めてから、2月のおわりにベトナムへ出発するまではとてもあっという間だったように感じます。実際にホーチミンに着いて街の様子を見てみると、私の想像していたよりも都会で栄えている印象を受けました。特に道路いっぱいにバイクが走っている光景にはとても驚きました。



は忘れることが出来ません。

ベトナムに着いてから、フォーや、春巻きなど、毎食ベトナム料理を食べましたが、どれも美味しく、その種類の豊富さにも驚きました。昨年イギリスに行った経験から、食事が自分の口に合い、充実していることはとてもありがたいことだと感じました。ドンコイ通りの店で食べたバインセオの味

フィールドスタディの前半は観光に行く時間が多く設けられていて、クチトンネルや戦争博物館に行ったことが



印象に残っています。事前のフィールドスタディの勉強会でベトナムの国民平均年齢が若いと聞いて、そのときは少子高齢化が進む日本と比べて、ベトナムは未来が明るい国なのかなと単純に思っていました。しかし、ベトナム戦争について学ぶうちに、そう遠くない昔に戦争で尋常ではない数の人々が亡くなったため、若い世代の人々が必死になって国を建て直してきたのだということを知り、私がホーチミンの街中で感じた活気や、「生きていく」という感じに納得がいったように感じました。



私が今回のフィールドスタディで楽しみにしていたものの一つにホームステイがあります。事前には二人一組で一軒の家庭に伺うと聞いていましたが、実際は一人で訪問することになり、緊張と不安でいっぱいでした。私がお世話になったのは、ホーチミン市師範大学日本語学部の卒業生の方のお家で、会って間もない私に美味しいご馳走を用意していただいたり、家族の一員のように会話に入れてい

ただいたりして、とても温かくもてなしてくれました。2日目の朝には、アオザイを着させてもらいホストファミリーと写真も撮りました。一泊二日のホームステイをととても楽しく、短く感じたのは、素敵なホストファミリーのおかげだったと思い、感謝しています。

フィールドスタディも残り二日となったころに、始めて日本とベトナムの教育グループで集まり、話し合いをしました。残り一日の日に、午前は幼稚園のインターナショナルスクールに、午後は中学校に訪問して、日本と比べてとても進んでいる早期英語教育や、子どもたちの積極的に、かつ楽しんで英語を話している姿を目の当たりにして驚きました。また、日本の教育では成績が振る



われない生徒をサポートすることが多い一方、ベトナムの教育では成績が優秀な生徒の能力をさらに伸ばそうとするアプローチをしているという点で違いが見られ、面白いと感じました。しかし、少し心残りだったことは、教育グループのベトナムの学生さんたちと情報共有や役割分担が上手くいかなかったことと、発表準備に使える時間が少なかったことです。私はベトナムの学生さんたちも、私たちと同じように教育について勉強したいという気持ちがあり、発表の準備や本番も私たちと一緒にやるものだと思っていましたが、実際はベトナムの学生さんたちはあくまでも日本人の私たちがスムーズに調査が行えるように通訳などのサポートをしてくださり、とてもありがたかったのですが、何か違和感がありました。私が思うようなフィールドスタディにするためには、教育グループのリーダーとして早いうちからベトナムの学生さんたちと連絡を取り合い、話し合いをして皆の意識を合わせておく必要があったと思い後悔しています。



今回のベトナムフィールドスタディではホーチミンの観光を楽しんだり、フィールドスタディでベトナムの教育について調査したりしましたが、その他に私が印象に残ったことは、ベトナムの学生さんたちがとても積極的に日本語を使って、私たちに関わろうとしてくれたことです。ベトナムの学生さんたちは、私たちが師範大学の食堂で食事をするときは食べ物を注文してくれたり、観光地へ行ったときは、店員さんと値段交渉をしてくれたり、とても親切でした。そんな彼女たちの姿を見て、国際交流とは国と国との交流ではなく、人と人との交流なのだと感じました。そして、外国語を習得するには、何よりもその言語を積極的に使おうとする態度なのだという事も強く実感し、英語を勉強している身としてとても刺激されました。

また、今回のベトナムフィールドスタディが楽しい思い出になったのは、三重大学の七人の仲間のおかげであるとも強く思っています。皆で毎晩ドンコイ通りに出かけたことや、ホテルの一つの部屋に集まり夜な夜なトランプで遊んだことも、私たちの仲を深めてくれました。ベトナムフィールドスタディが終わったのと同時に離れ離れになるのではなく、これからも七人と楽しく付き合っていきたいです。

最後に、ベトナムフィールドスタディに引率して下さった奥田先生、正路先生、ホーチミン市師範大学日本語学部の先生、学生さんたち、そして三重大学の七人の仲間たちに、深く感謝します。楽しい経験をさせていただき、ありがとうございました。

ベトナムフィールドスタディ 2017 報告書

教育学部 理科教育コース 2年 佐藤 有紗

1, 参加の動機

私はもともと東南アジアへ行ってみたいという気持ちを持っていた。しかし、自分たちで計画して旅行として行くのでは、遊びがメインになってしまうし、治安的に少し不安があったことから実行できずにいた。そこで、国際交流センターが「ベトナムフィールドスタディ」という研修を行っているという友達から教えてもらった。研修なら先生が同伴してくれるから安心である、現地の大学へ通うことでたくさん外国の文化を学ぶことができると思い、私にぴったりだと思った。その上、通う大学が「ホーチミン市師範大学」いわゆる教育大学だったので、現地の教育状況も学べるチャンスだと思った。

春休み期間中が活動中心であるサークルに所属していたり、周りのみんなから「なんでベトナム？」と不思議がられたりすることも多かったが、今では参加することを決めて本当によかったと思っている。

2, 出発準備について

私が注意していたことは、大きく分けて3つある。一つ目に、季節変化についてである。日本が冬の気候で気温が低い時に出発し、ベトナムは気温 30 度と気温差が大きいので、現地で着る服や日よけの帽子などを忘れないようにした。また、虫よけや制汗剤なども日本製が優れているということで用意した。二つ目に、衛生面についてである。ベトナムではお手拭きが有料であったり、水が日本ほどきれいでなかったりという状況なので、手を拭けるシートを多めに持っていくべきだと思った。三つ目に、安全面についてである。時によってはスリにあってしまう可能性があるため、パスポートや保険証、現金などは常に身につけられるように肩にかけられるカバンを持っていき使用した。

3, 現地での活動について

私はまずベトナムの教育状況について知りたいと思っていた。発展途上国ということもあり、今のベトナムはどのような教育を通して、どのようにして子供を大人へと成長させようとしているのかという点に興味があった。特に日本の教育との違いを見て、日本の教育に足りない点、日本の教育の強みを考えたいと思っていた。また、ベトナム戦争があったことを受けての平和学習などの取り組み方にも興味があった。

まず、大学の日本語の授業を受けた。ここで驚いたのが、私たちが想像していたより難しいことをベトナム学生が学んでいたということだ。「浪人」「予備校」といった日本でもあまり馴染みのない言葉を使った文章をベトナムの学生は教師と一緒に朗読しているのを見て、日本語を学び始めて約 2 年とは思えないほど流暢に取り組んでいた。また、日本の

大学について知っていることを書き出すグループワークでは、「入学試験がある」「東京大学は賢い」などより詳しいことまで認知している印象を受けた。授業に私たち日本人が参加させてもらおうと、たくさん話しかけてきてくれたり、日本についての質問をしてくれたりと日本について知りたいという意思の強さがとても印象に残った。また、授業で用いられる言語はほとんどが日本語で統一されているのも印象的であった。

次に、インターナショナルの幼稚園に訪問した。その幼稚園には英語のクラスがあり、週の決められた時間になると英語の授業を受けていた。幼稚園ということもあり、内容は英語を使って歌を歌ったり、レクリエーションをしたりして楽しく英語を学べる内容であった。その授業で使われている言語はすべて英語であり、学校の方針として、英語とベトナム語を完全に分けて学ばせることで言語を混ぜて覚えてしまうことを避けているということだった。幼いころに二言語学ぶと混乱してしまうのではないかという心配は日本でも保護者から多くされていることであるが、徹底した対策を行うことで解消されることなのだと学んだ。また、日本の幼稚園よりも1クラス当たりの子供の数が多いのも特徴的であると感じた。

最後に、公立中学校へ見学に行った。英語を話せる生徒の割合が非常に高く、廊下を歩いているだけでも「hello」と声をかけてもらえる雰囲気だった。日本だと外国人が自分の学校に来ていてもみんなが積極的に英語で関わろうとはしないと思うので、日ごろから英語を身近に置いているからこそできることだと考えた。さらに、英語で数学の授業を行うなど英語を用いて難易度の高いことにも取り組んでいると学んだ。また、成績優秀者は紙に名前が張り出され、補助金が貰えたり、良い高校へ進むことができたりと学力が大きく重視されている教育システムだと感じた。

4. 日本人学生やベトナム人学生とのグループ活動について

同じ教育学部ということもあり、日本人学生との活動は調べたい内容などはスムーズに決まった。もともと予定していた小学校訪問には行くことができず、幼稚園・中学校の訪問のみだったが実際の現場を見ることができて、生徒と触れ合えることができ有意義な時間を過ごすことができた。その中にベトナム人学生がいてくれることで補足説明してくれながら見学できたのでより詳しいことを学ぶことができた。

しかし、初めに調査内容を決めるときに教育という専門的な内容の知りたいと思っていることを伝えるのは、なかなか言葉が通じず苦労した。例えば、私の専門分野である「理科」を伝える際にベトナムでは理科という名前の教科が存在しないのでなかなか伝わらなかった。また、「同じ」という単語が伝わらないので「少し同じ」と言い換えるなど、会話一つ一つに工夫が必要で言葉が通じないことの大変さを身をもって痛感した。

また、平和学習について勉強したいと思っていたが、思うように伝わらない日本語と英語で戦争についてベトナム人学生に尋ねるのはとても難しかった。日本語だとオブラートに包んで聞くことができるが、直接的な言葉を使わないと伝わらないのでそのギャップに

私たち日本人学生は非常に苦しんだ。

また、ベトナムの教育についてベトナム人学生から情報を貰おうと思い、たくさん質問をしたが、今の大学生が小学校や中学校へ通っていた時代と今の小学校・中学校で行われている教育にはある程度の違いがみられ、今の教育状況を知っている学生が少なかったのも、思うように調査が進められない部分があった。

5. 帰国後振り返って、参加して自分のどのような部分がどのように成長したか・しなかったかについて

私がベトナムフィールドスタディへ参加して成長したと思う点は一つある。一つ目は、人との接し方である。今までは日本語が通じる状況でしか生活することがなかったため、注文するのも簡単だし、ホテルで不備があれば伝えるのも容易なのが普通であったが、外国ではそうはいなかったからである。例えば、ホテルのフロントに鍵が開かないことを伝えることだけでもどのように言えば伝わるかわからないのでジェスチャーと英語でなんとか伝えたり、買い物の際金額を英語で言ってくれているのに聞き取れなくてお金を払えなかったりと日本なら困らないことも言葉が通じないだけでこんなに大変になるんだと初めて実感した。その際に私のできることを精一杯してなんとか伝えようとする経験をして、日本ではできない経験ができて成長できたと思う。私は小学校の教諭になりたいと思っているので、小学生だとまだまだ言葉だけでは通じないこともあると思うのでそのときにも応用できると考えている。

二つ目に、外国という新しい文化に触れて日本と異なる文化を知れたことである。日本では交通手段は車が多いのに対し、ベトナムではバイクが主流だったり、お金を払うのは料理を食べた席で払うのがマナーであったり、日本とは違う文化に触れることができた。今までは当たり前だと思っていたことは全く通じない生活をして、とても素晴らしい経験をする事ができたと思う。

しかし、ベトナム学生が手助けしてくれる点が多く、それに甘えてしまうことが多くなってしまったのも事実であった。日本語が通じなくて困っている私たちをたくさん助けてくれて、自分から行動する機会を捨ててしまった時があった。自分から行動しようとする点に関しては、成長できないところがあったと少し後悔がある。

おわりに

このベトナム・フォールド・スタディ（VFS）三重大学国際交流センター主催の研修事業として、今回で第10回目を迎えるものです。毎年10名前後の三重大学の学部生が約10日間ベトナムに滞在し、ベトナム・ホーチミン市近辺の名所を訪問したり、師範大学の学生や教員と交流活動を行ったり、またはベトナム人家庭のお宅にホームステイをさせてもらったりしながら、日越交流を図るものとして実施してきました。今年度は8名の三重大学生（人文学部4人、教育学部4人）が参加し、2人の引率教員と一緒に、ベトナムに渡りました。

このVFSに先立っては、前年の秋から参加学生が集まって、計5回のベトナム勉強会を開いてきました。ベトナム人留学生を講師に招いてベトナム語を学んだり、ベトナムの通貨や食べ物、または有名な観光地などについて各学生がプレゼンテーションを行ったりしてベトナムについての理解を深めてきました。とはいえ、やはり現地についてからの実体験に勝る学習はなかったような気がします。ベトナムの通貨で買い物の支払いをしたり、タクシーをつかまえたり、車やオートバイが行き交う道路を渡ったり、またベトナム人学生の優しさに感動したりなど、参加学生は皆ベトナムという国とその文化について、実体験に基づいた自分なりの理解を得ることができたのではないかと思います。

今回の研修は、まずホーチミン市師範大学の学生と教員の皆さんによる開講式と、それに続くベトナム語講義から始まりました。ベトナム語講義の中では、参加学生の皆が一人一人順番に、覚えたてのベトナム語でたどたどしく自己紹介をしていました。このころはまだお互い遠慮がちなところもあったように思われましたが、その後の数日間で8人の学生はあっという間に仲良くなり、移動バスの中や食事の時には大声で話し、笑いながら、クレヨンしんちゃんのモノマネをする者あり、AKBのダンスを踊る者あり、まるで中学生の修学旅行かと思われるような雰囲気です。最終日まで過ごすことになりました。

また参加学生の皆さんは、このベトナム研修の本来の目的である学習の面でも、しっかりと意識を持って取り組んでいました。研修前半のベトナムの文化と歴史についての講義では皆ノートを取りながら熱心に聞き入り、また何人もの学生が手をあげて質問しました。そして最終日のプレゼンテーションでは、8人が二グループに別れてベトナムの文字の歴史とベトナムの教育について発表しましたが、研修前半の講義の内容や、現地の遺跡や学校見学の内容、ベトナム人学生への聞き取り調査の内容、また日本との比較などが盛り込まれており、どちらのプレゼンテーションもほんの数日間で完成させたとは思えない素晴らしい内容の発表でした。皆、毎日既定のスケジュールが終わった後買い物に出かけたり、部屋で大富豪をしたり、夜は有名なホテルに飲みに出かけたりしながら、いつこれだけの発表準備をする時間があつたのか、引率教員としては感心するばかりです。

色々なことがありましたが、今回の研修に参加した学生達にとって一番心に残ったのは、やはりベトナム人の皆さんの優しさではないでしょうか。私たち三重大学のメンバーが毎

日色々な場所を訪問するたびに、ホーチミン市師範大学のベトナム人学生が数人ついてきてくれて、通訳や案内をしてくれました。また、三重大学生の最終日の発表のための調査にも積極的に協力してくれたばかりでなく、一緒に発表してくれました。ホーチミン市師範大学の学生たちだけではなく、三重大学生が一人または二人ずつ泊まらせていただいた現地のご家庭でのホームステイでは、どのご家庭も大変歓迎してくださいました。このフィールドスタディの終わりが近づくに連れて、参加学生の8人が「日本に帰りたくない」「もっとここに居たい」と言っていました。そう思えるようになったのは、ベトナム人の方々の優しさのせいだと思います。今回この研修に参加した三重大学生がベトナムでの8日間を楽しめたことが、(小さな規模ではありますが)日越の平和的な関係を築く礎の一つであり、それがこのベトナムフィールドスタディの意義だと思います。

最後に、この三重大学ベトナムフィールドスタディの私達を受け入れてくださったホーチミン市師範大学の皆さん、特に私たちのスケジュールをコーディネートしてくださった Nga 先生、ベトナムの歴史と文化についての講義をしてくださった Lieu 先生、またその Lieu 先生の講義を同時通訳して下さり、またご自身が担当される日本語のクラスを見学させてくださった Trang 先生に、心からお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

(正路真一)



初日



発表準備



ドンコイ通り



閉講式

VI. 卷末資料

1. 担当業務：

- フィールド調査グループリーダー：
 - 歴史・生活グループ：隅まりや
 - 教育グループ：中林彩乃
- ① フィールド調査グループの取りまとめ
- ② ベトナム学生グループとの連絡調整

- 観光・訪問先リーダー：
 - 佐々木歩、佐藤有紗、坂本京子
- ① 訪問先でチケットを買い、配布する
- ② バス乗車時や集合時の人数確認

- 授業・出し物リーダー
 - 山下響、河合紘志、内田陽菜
- ① ベトナム語・文化の授業の際に担当の先生との連絡や贈呈品を渡す
- ② 最終発表のあとの出し物を決め、練習する

2. ホーチミン市師範大学との合同グループ

歴史グループ

三重大学生	ホーチミン市師範大学生
山下 響	Phạm Thị Thủy Tiên
河合 紘志	Quan Phương Anh
佐々木 歩	Huyền Quang Sơn
隅 まりや	Đào Bích Ngọc Trúc
	Nguyễn Thị Quỳnh Trang
	Nguyễn Trần Minh Ngọc

教育グループ

三重大学生	ホーチミン市師範大学生
内田 陽菜	Ngoc Anh
坂本 京子	My Duyen
中林 彩乃	Anh Nhi
佐藤 有紗	Hoang Huy
	Le Huyen
	Ngoc Yen

3. 修了証書授与式 Xin chúc mừng



